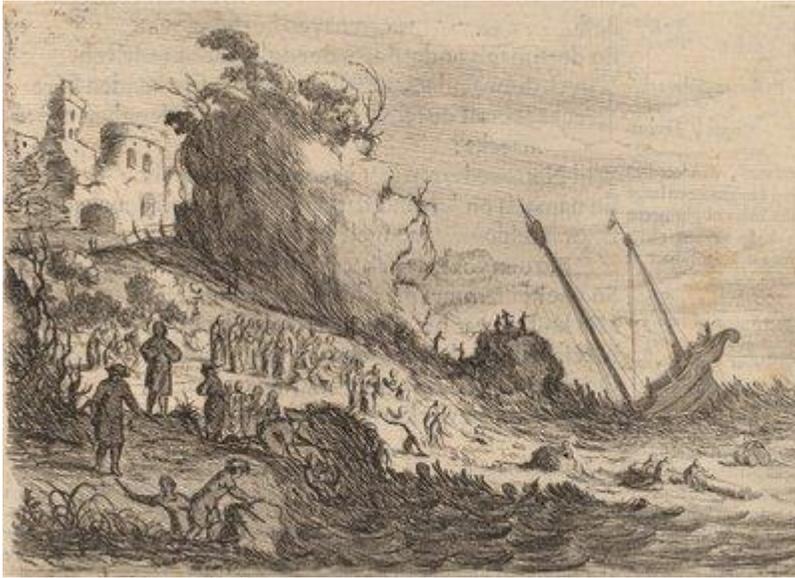


良い港を出た船は暴風に吹き流されて、船は翻弄され、乗る者たちの希望は失われてしまいました。そこで、パウロが伝えたメッセージは「元気を出しなさい。必ず守られます」というものでした。



1. アドリア海を漂い (27～32節)

①十四日目の夜になり (27～28)「十四日目の夜になって、私たちがアドリア海を漂っていると、真夜中ごろ、水夫たちは、どこかの陸地に近づいたように感じた。水の深さを測ってみると、四十メートルほどであることがわかった。少し進んで測ると、三十メートルほどであった。」

船上での14日間の漂いは容易ではなかつたでしょう。船がイタリアとギリシャの間にあるアドリア海を進んでいると、真夜中になって、水夫達は陸地が近いことを感じ取っていました。水深は40メートル。さらに進んでから測ってみると30メートルになっていて、明らかでした。

②四つの錨を (29)「どこかで暗礁に乗り上げはしないかと心配して、ともから四つの錨を投げおろし、夜の明けるのを待った。」

ここまで来ると、水面下にある岩に乗り上げることが心配されました。そこで、水夫たちは、船が勝手に移動してしまうことを防ぐために、四つの錨を投げおろしました。

③逃げ出そうとした水夫たち (30～32)「ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとして、へさきから錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていたので、パウロは百人隊長や兵士たちに、『あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません。』と言った。そこで、兵士たちは、小舟の綱を、そのまま流されるのに任せた。」

しかし、水夫たちは自分達だけで、秘かに逃げ出そうとしていたのです。へさきから錨を降ろすしぐさをしつつ、小舟をおろしていました。それを察知したパウロは、百人隊長に、水夫たちがいなければ、誰も助からないと告げました。命を受けた兵士たちは、こともあろうに、小舟の綱を切ってしまい、小舟は流されていきました。

2. 元気を取り戻した人々 (33～38節)

①食事の勧め(33)「ついに夜の明けかけたころ、パウロは、一同に食事をとることを勧めて、こう言った。『あなたがたは待ちに待って、きょうまで何も食べずに過ごして、十四日になります。』」

夜明け前、パウロは船にいる人々に、食事する事を促します。なにしろ、これまでの14日間は絶望と船の激しい揺れて、食事をする事もままならなかったのです。絶食状態で体力も弱っていました。

②髪一筋も失われず (34～35)「ですから、私はあなたがたに、食事

をとることを勧めます。これであなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません』。こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて食べ始めた。」

そんな彼らに食事が必要だと認め、パウロは食事することを促したのです。まずは彼らの「髪一筋も失われない」という約束をし、パウロ自身が、神に感謝をささげて、パンを裂いて食べ始めました。

- ③十分食べて (36～38)「そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。十分食べてから、彼らは麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。」

船にいる人々も元気を得て、食事を始めました。ルカは食事の介助していたのでしょうか。人数を把握し 276 人であった記しています。皆が十分食べてから、あとは船を軽くするために、麦をも捨てました。

3. 276 人は皆無事に (39～44 節)

- ①砂浜のある入江 (39～40)「夜が明けると、どこの陸地かわからないが、砂浜のある入江が目にとまったので、できれば、そこに船を乗り入れようということになった。錨を切って海に捨て、同時にかじ綱を解き、風に前の帆を上げて、砂浜に向かって進んで行った。」

夜が明けると、陸地が確認され、砂浜の入江が目に入るようになりました。その入江に船を乗り入れることを目論見ました。必要がなくなった錨を捨て、舵の役割を果たすかじ綱を解き、帆をあげて、砂浜に入っていくようにしたのです。

- ②船は座礁し (41～42)「ところが、潮流の流れ合う浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。へさきはめり込んで動かなくなり、ともは激しい波に打たれて破れ始めた。兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと相談した。」

ところが、このマルタ島の海峡が潮流の流れ合う所だったので、その浅瀬に船は乗り上げ、座礁してしまいました。へさきはめり込んで動かなくなり、ともの方は波に打たれて破れ始めました。兵士達は逃げ出す可能性のある囚人を殺してしまうというものでした。

- ③助けられたパウロ (43～44)「しかし百人隊長は、パウロをあくまで助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、それから残りの者は、板きれや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして彼らはみな、無事に陸に上がった。」

百人隊長は、パウロの人格やローマ市民であることを尊重し、助けようと思い、兵士達の計画を押さえました。その上で、泳げる者は泳ぎ、残りの者は板切れなどにつかまり、陸に向かわせました。その結果、そこにいた全員が助かったのです。

《結論》

「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ。』と言われた」(使徒 23:11)。この約束のお言葉は真実でした。

ユダヤ人たちにたくさんの罵声を浴び、迫害を受けました。40 人のユダヤ人の決死隊が殺そうとしたときも、千人隊長の計らいで 470 名もの護衛隊が備えられて、カイザリヤに連れられました。そして、そこから船出し、難航しながらも、クレテ島の良い港にたどり着いたのです。ところが、船はまたも出されてしまい、暴風を受け、行き先を見失い、漂い出していました。地中海の風にまかせて進み、アドリヤ海を進むと、陸地らしきものが見えてきました。イタリアの南側にあるマルタ島だったのですが、船はその入江にはいり座礁したものの、276 人全員が無事に陸に上がることができました。

ひとたびは絶望した人々の喜びはどれほどであったでしょう。荷物を捨て、失った物も多くありましたが、命の有難さを思ったことでした。パウロは一貫として、「彼は望みえないときに、望みを抱いて信じました」(ローマ 4:18) を信じ、やってきましたが、改めて主のお約束の真実を確信したことでしょう。

絶望のなかで、彼は「元気をだしなさい。」と励ましましたが、今朝の聖書箇所では、ずっと食べられないで来た人々にパンを食べることを勧めました。そして、神に感謝をして率先して食べています。パウロは主の約束が実現するために、何もしなかったわけではありません。ここでも、彼が食事を勧めたのも、先を見通していたからです。「腹が減っては戦(いくさ)はできぬ」と言われますが、人々が陸に上がるまでには体力が必要であると踏んだのです。実際、船は入江にうまく入ることはできず、浅瀬に乗り上げて座礁してしまいました。ちょっと前に兵士達が小舟を流してしまいましたから、場合によっては海を泳ぐ必要があるとも推測したのでしょう。現実にもそうなり、食事をして元気を得ていた人々は全員が助かったのです。

かつて主イエスは集まってきた人々を、五つのパンと二匹の魚で男 5 千人が養われたということがありました。それは、彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれまれたからでした(マルコ 6:30 以下)。主も人々の健康と食事のことを心配してくださっていたのです。また、主イエスはパンと杯をいただくことを通して、キリストの十字架と復活を覚える道を開かれました。考えてみれば、礼拝の中に、飲食をするという行為が入っているのは驚きです。

私たちの生活でも、食するという行動は重要です。新たなる元気を与えるために主は食事を与えて下さいました。教会においても、共に食することは用いられます。食事会に出られなくても、礼拝後のお茶の交わりに加わり、食しつつ分かち合うことは有益です。これから歌う讚美歌 454 にはこうあります。「うるわしき朝も しずかなる夜も、食べ物、着物も 下さる神様」。朝や夜を与えてくださる神様は、食べ物、着物も与えて下さいます。個人的にも、教会の働きにおいても、元気をなくしてしまった時に、主が下さる食物、飲物を感謝していただいて、新たなる出発をさせていただきましょう。